芸術学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Art

■ 博士（芸術学）
■ Doctor of Philosophy in Art

人材養成目的 / Program Educational Objectives

造形芸術に関する創造的な研究能力を有し、卓越した専門的知識と実技能力によって、公的機関および企業等、社会の様々な領域において貢献しうる研究者、および確固たる教育能力と研究能力を有する大学教員を養成する。

養成する人材像	造形芸術に関する幅広い学識と高度な研究・開発能力および実技能力によって、教育機関、行政機関、企業等、国内外における社会の様々な方面において、研究、教育の指導的役割を担う人材
修了後の進路	大学教員、美術館・博物館学芸員、行政機関や企業等の研究者。その他、画家、版画家、彫刻家、書家、造形作家、写真家、建築家、デザイナー、イラストレーター、映像作家、評論家等の、芸術ないしデザインにおける創造的表現能力を有する研究者

芸術学学位プログラム（博士後期課程）　／　博士（芸術学）
Doctoral Program in Art / Doctor of Philosophy in Art

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（芸術学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、DC 展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、DC 展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人物に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自身の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、DC 展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、DC 展での企画・運営・作品発表、TA・TF 経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、国外での活動、国際共同研究（留学生を含む）、TOEFL、TOEIC 等受験、DC 展での企画・運営・作品発表、国際学会・会議等における論文発表・研究発表、国際コンクール等への応募など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 独創力：芸術学領域において、一定の学術的意義を有した独自の研究を遂行できる能力	①芸術ないしデザインの分野において、独創的な課題ないし解決を発見したか ②先行研究に見られない、独自の観点をもって研究を遂行したか	芸術学特別演習ⅠA、芸術学特別演習ⅠB、芸術学特別演習ⅡA、芸術学特別演習ⅡB、DC展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
	7. 活用力：芸術学領域において、信頼性ある学術的方法論を活用ないし提案する能力	①芸術ないしデザインの分野において認められた、信頼性ある学術的方法論を用いたか ②新規で有用な学術的方法論を提案し実証することができたか	芸術学特別演習ⅠA、芸術学特別演習ⅠB、芸術学特別演習ⅡA、芸術学特別演習ⅡB、DC展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
	8. 開発力：芸術学領域の学術進展に寄与する、新規で有用な信頼性ある結論を導く能力	①芸術ないしデザインの分野において、学術進展に寄与するため、視野を拡大する課題を設定したか ②新しい課題ないし目標を設定し、新規で有用な知見を導いたか	芸術学特別演習ⅠA、芸術学特別演習ⅠB、芸術学特別演習ⅡA、芸術学特別演習ⅡB、DC展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
	9. 展開力：芸術学領域の学術進展に寄与する、研究発展性を見据える能力	①芸術ないしデザインの分野において、学術進展に寄与するため、発展性のある課題を設定したか ②将来、研究の展開が予想される結論を導いたか	芸術学特別演習ⅠA、芸術学特別演習ⅠB、芸術学特別演習ⅡA、芸術学特別演習ⅡB、DC展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度自己評価シート」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 －「研究計画書」（年度初め）及び「研究指導成果報告書」（年度末）によって、各年次における研究の計画と成果を点検し、学修・研究に関わる取組とその成果をもとに知識・能力の到達度について主指導及び副指導による評価と指導を行う。 －「対応する主な学修」における成果（「芸術学特別演習Ⅰ・Ⅱ」における研究発表、授業外の活動等）をもとに「評価の観点」に従って知識・能力の到達度を点検し、12月に実施する達成度評価（達成度自己評価シート）によって学位授与の方針に基づく知識・能力の修得状況を確認し、評価する。 － 達成度評価におけるコンピテンス項目の数値基準（コンピテンス取得数：1年次終了までに18個、2年次終了までに36個、学位論文提出時までに40個）を設定している。 － 学位論文審査委員会において博士学位論文の審査を行うとともに、予備審査時に提出された「達成度自己評価シート」によって学位を受けるために必要な知識・能力の有無を判定する。		

学位論文に関する評価の基準	学位論文が満たすべき水準として、筑波大学大学院学則に規定された要件を充足し、学位論文が下記の評価項目について妥当と認められ、かつ最終試験で合格と判定されること。 1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、芸術学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. 芸術学分野の発展に寄与する独自の研究成果が、学術論文として発表するのにふさわしい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が、芸術学分野の博士論文にふさわしい形式にまとめてあること。学位論文審査委員会は、主査 1 名、副査 3 名以上、計 4 名以上で構成される。審査では 2 回以上の口述試験と公開発表を行うとともに、最終試験を受ける。 なお、学位論文の審査を願い出ようとする者は、事前に学位プログラムにおける予備審査に合格しなければならない。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

芸術学学位プログラムは、芸術ないしデザインの各領域を専門とする研究のほか、隣接関連領域と連携し学際性を強化した研究を展開する。主指導教員と副指導教員による、博士論文執筆の個別指導と助言を行い、全教員の参加による「芸術学特別演習Ⅰ・Ⅱ」における指導と評価によって、国内外の学会における審査付研究発表および学術誌への査読付論文投稿に必要な力量や実技能力を養成する。

教育課程の編成方針	– 「芸術学特別演習Ⅰ・Ⅱ」（必修）によって、1. 知の創成力、2. マネジメント能力、3. コミュニケーション能力、4. リーダーシップ力、5. 国際性の各コンピテンスの能力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	– 各年次において、主指導教員と副指導教員による個別指導を行う。 – 各年次において、「研究計画書」および「研究指導成果報告書」を提出する。 – 各年次において、作品制作を主たる研究領域とする者は、作品展示によって研究成果を公開する。 – 1・2 年次において、各学期に「芸術学特別演習Ⅰ・Ⅱ」を実施し、複数の教員による口頭試問を行う。 – 3 年次において、予備審査委員会による審査を行う。 – 3 年次において、学位論文審査委員会は、最終試験と博士学位論文の審査を行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	理論研究を主とする場合には、専門領域に関する知識および知的探求能力とともに、芸術に対する深い理解と感受性を有した人材を求める。制作研究を主とする場合には、独自の表現世界を確立するための創造的態度と能力とともに、分析的・合理的思考力を有した人材を求める。
入学者選抜方針	修士論文またはそれと同等と認められる研究内容、および入学後の研究計画について口述試験を行う。またこれに基づき、専門領域に関する質疑応答を行う。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– 副指導教員体制により、研究指導の客観性を保ち、多様な相談に対応する体制を整えている。 – 授業時間外における自主的な学修・研究活動（論文・作品の発表、学内外プロジェクト参加等）を推奨し、自主制作・自主研究のような科目外の活動を学習成果の要素としてとらえることを学生に伝え、学生の研究意欲を高めている。 – 教育組織の内部ないし外部における論文の投稿機会を周知し、学生の論文発表をサポートしている。
学生同士の交流機会	–「芸術学特別演習Ⅰ、Ⅱ」の研究成果発表会において、履修生が進行に関わるとともに、質疑応答等の機会を通じて学年や分野の異なる学生間の学びを促している。 – 主に制作系学生の研究発表の場として展覧会「DC 展」を開催し、研究の成果物である作品の展示・公開によって研究に関連する制作実践を検証する機会を設けている。同展では、様々な表現媒体の領域に所属する学生の作品展示のほか、制作系以外の学生の研究内容を紹介するパネルの掲示を行っており、多様な領域の出品者による主体的な企画・運営を通して異分野間の交流を促している。
教員との交流機会	–「芸術学特別演習Ⅰ、Ⅱ」の研究成果発表会に学位プログラム担当教員全員が参加し、指導教員のほか、指導教員以外の教員による助言・指導を通して多様な視点を交えた意見交換の機会を設けている。 –「芸術学特別演習Ⅰ、Ⅱ」において、博士後期課程修了者や学外の研究者による「特別講義」を実施することで、学生が研究者としてのキャリア形成について考え、学修意欲を高める機会を提供している。 – 本学位プログラム主担当教員主催の研究プロジェクト等への参加によって学生と教員の交流を活性化するとともに、学外の研究者や作家等と交流する学会、美術公募団体、各種研究会への参加も促し、芸術分野における先達とのコミュニケーションによって学生個々の学修意欲を高め、研究の質の向上につなげている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

学修教育検討委員会等において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

– 教務情報や IR データにより学生の学修状況等を確認する。
– 芸術関連組織における学修・研究の課題を抽出し、各組織共催による FD 研修会を開催する。